

が存在する。木材においても一物一価の法則が働くのであるから、育林行程における総資本及總勞動量(生育期間の關係を含めて)は、天然材採取の其等より大なるを得ない。而して天然林の減少はその採取技術量を高め從つて育林技術量を高める。

(2) 内在的條件

i) 知的條件 林木環境の形成である育林技術に内在して最初にこれを制約する條件は、林木の生活能と環境との關係についての我々の経験的乃至自然科學的知識の高さである。現在の育林技術はこの條件の一定の高さに於て展開されている。

ii) 有様的條件 そのものとしては無む的行程である環境形成は林木の生活能という物理的性質と結合して生産技術となる。従つて生産量の増加或は生産期間の短縮はこの有様的性質に制約されて所謂収穫速減の原則が作用する。

iii) 空間的條件 林木の環境といふのは林木の占める空間的大いさに關係する概念である。例えば同一単位の環境も苗木に於て小さく壯木に於て大である。技術の投下は一定の効率を基準とするから環境形成技術の投下量は苗木に於て大、壯木に対して小となる。

(⇒)

要するに育林技術(環境形成)が外在條件の変化に応じて高度化せりとするとき、技術の内部に於ける發展の方向は有様的條件と空間的條件とに対抗する二方向とその合理的組合せになり更に知的條件の高度化客觀化がその基礎条件であると言える。

胸高直徑の個人測定誤差に就て

九大農学部 西沢正久

昭和25年2月27日、鹿児島県薩摩郡台鹿岳標記調査試験地設定期間人夫個人間の測定に差があるかどうかを検定するため、Plot 21.27に胸高直徑個人測定誤差試験区を設けてスギ21本広葉樹1本計22本に対して11人の人夫に直徑尺で胸高直徑を1回測定させて測定させた。斜面に対して下方の木の半面にパンキで胸高部位を表示し最初斜面上方より下方に測定し、終つて下方より上方へ表示せる胸高部位を測定させた。従つて1人に対して44回測定、全測定回数484回である。測定結果を個々の測定値を省略して平均値のみを示せば次の通りである。

第一表 測定者別 44本の胸高直徑平均値(公分)

測定者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	全平均
平均値	185	199	200	199	201	189	202	188	201	199	201	197

第二表 樹木胸高表示の有無別 11人測定平均値(種)

木種名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
印 有	22.1	28.1	20.9	25.8	19.6	16.2	21.0	16.7	12.7	16.5	15.9	28.0	25.8
印 無	21.8	29.0	20.9	25.7	19.4	16.1	21.1	16.9	12.7	16.6	15.7	28.2	25.5
平均値 (22回)	22.0	28.7	20.9	25.8	19.5	16.2	21.1	16.8	12.7	16.6	15.8	28.1	25.7
	14	15	16	17	18	19	20	21	22				
	22.3	20.6	19.5	11.7	13.9	29.8	12.7	18.8	14.9				
	21.9	20.5	19.7	11.8	13.9	29.5	12.9	18.9	16.2				
	22.1	20.6	19.6	11.8	13.9	29.7	12.8	18.9	15.5				

個人間に差が認められるかどうかを検定するため測定結果を分散分析すると次の通りである。

第三表 分 散 分 析 表

要 因	偏 差 平 方 和	自由 度	平 方 和 平 均	F
人 間	134.48	10	13.448	53.98**
木 間	1305.916	21	62.1865	272.748**
印 間	0.30	1	0.300	1.32
木×人	34.61	210	0.165	
木×印	15.24	21	0.661	
印×人	1.02	10	0.102	
人×木×印	26.44	210	0.126	
全	1327.125	483		

第三表によれば個人の測定間には必然的な差が認められる。試みに剩者A及びGをとりだして第二表の22回測定平均値及び個人測定値との間の相関係数及び回帰方程式を求めると第四表の如くである。

第四表 A 及び G の 22回測定平均値に対する
相関係数及び回帰方程式

測 定 者	A	G
相関係数 $r \pm br \frac{S_{xy}}{\sqrt{(Sx^2)(Sy^2)}} \pm \frac{1-r^2}{\sqrt{n-1}}$ $t = \frac{r\sqrt{n-2}}{1-r}$	0.994 ± 0.002 49.37^{**}	0.997 ± 0.001 55.71^{**}
回帰方程式	$Y = 16.7 + 0.98X$	$Y = 1.01X - 0.60$

第四表によれば個人測定値と22回測定平均値との間には高度の相関が認められ個人により一定の傾向があるので個人間の差は第一回の如き回帰方程式により補正する事が必要である。

插入深度
 γ
cm

第一圖

